

キャンヘルプタイランド

ネットワーク通信

バンコク便り

2013年7月27日発行 第62号

バンコク在住の西川会長から

7月の始めに Free のむさん、運営委員の藤井とともに、建設支援を行っているバーン・メーガオ学校へ視察に行ってきました。

視察報告は別ページに譲るとして、今回の視察旅行で感じたことを書き留めておきたいと思います。

<移動手段としての LCC の発達>

学校があるのは、北部メーホンソン県の南にある「メーサリアン」という小さな町からさらに車で30分ほど南に下ったところ。今回、私たちはバンコクからチェンマイまで飛行機で飛び、そこからバスで4時間半ほどかけてメーサリアンまで行き、そこから校長先生に車で学校まで連れて行ってもらう、というルートで目的地を目指しました。

今回の視察で飛行機を使うことにしたのは、時間的制約もさることながら、LCC（格安航空会社）の普及でタイの国内線運賃がバスと変わらないぐらいにまで下がってきたということがあります。一昔前まではバンコクから地方への足と言えば、バスか列車しかなかったものですが、今やその選択肢に確実に飛行機が入り込んでいます。長距離バスもまだまだ健在ですが、1等バスにほんの数百バーツ足せば時間が大きく節約できるとあって、1等バスを使っていたであろう多くのタイ人が飛行機を選択するに至ったのであろうということが、今回早朝の空港での混雑振りを見て改めて確認できました。タイにLCCが登場したのはずいぶん前のことですが、私が想像した以上にLCCの存在感は増しているのだと感じました。

<田舎にも Wifi が>

今回の目的地メーサリアンは、自転車でも一回りできるぐらいの小さな田舎町でしたが、実は知る人ぞ知る観光地だそうです。特に、乾季には自然を満喫したいバックパッカーや寒さを体感したいタイ人勧告客が訪れるらしく、町にはあちらこちらにゲストハウスがありました。私たちも学校訪問前にその中の一つに宿泊し、ゲストハウスの周りを散策したり、川沿いの喫茶店に入ってコーヒーを飲んだりして過ごしました。

そこで驚いたのは、ゲストハウスにも無料のWifiがあり、携帯電話をいじっていると、「Wifi、ありますよ」と声をかけてもらったことでした。タイの携帯電話を持っている私にはそれほどのありがたみはありませんでしたが、外国人観光客にとっては本当にありがたいサービスです。日本にはこうしたサービスはほとんどなく、あっても会員向けのサービスだったり、PCであらかじめ登録しておく必要があったり、日本の携帯キャリアを持っている人向けのサービスだったりして、観光客がその恩恵を受けることはあまりありません。Wifiが開放されていれば、それを使って写真をインターネットにアップしたりして町の宣伝に一役買ってくれる外国人がどれほどいることか。そう思って、私はメーサリアンの町の写真を撮って、Facebookに載せておきました。

＜電線を飛び越えて＞

私たちが建設支援をしているバーンメーガオ学校は、メーサリアンの町からさらに県境に向かって30キロほどのところにありました。学校の周囲には何もなく、携帯電話もまったく通じないところにありました。そういえば、ワークキャンプを始めた1994年から数年は田舎の学校に電話はなく、通信手段は無線でした。最近は固定電話はなくとも、携帯電話が使えるようになり、もっぱら通信は携帯電話でというところが多いのですが、この学校に来てふと以前の地方の学校のことを思い出しました。電話が使えないほか、教室が足りなくて一つの部屋に仕切りをつけて、二つの教室として使っているところなども、中学が義務教育化されて進学率が上がったころの田舎の学校そのものです。ただ、違ったところはソーラーパネルがあったことです。学校以外にもいくつかソーラーパネルが設置されている施設を目にしました。国の支援で設置されたとのことですが、地方では、固定電話を通り越して携帯電話が普及したように、電線が届く前にソーラーパネルによる自家発電設備が普及するというような流れでできていくのかもしれませんが。昔と変わらない点はあるものの、時代は確実に流れているのだということを実感した出来事でした。

ほかにも視察旅行で感じたこと、思ったことはありますが、またの機会にご紹介したいと思います。

西川弘達

報告1

～2013年度 奨学金授与式報告～

報告者 藤井 佳奈

今年の授与式は、例年よりも少し早い6月24日から7月1日という日程で行い、タイでは、雨量がやっと増え始めて、ちょうど田植えが盛んにになる頃の訪問となりました。

授与式の日程と各県の奨学生数は以下の通りです。

| | | | |
|-------|---------|----------|-----------------|
| 6月24日 | サックオ | 高校生以上 6人 | 小中学生10人(内新規1人) |
| 25日 | ブリラム | 高校生以上 7人 | 小中学生13人(内新規3人) |
| | スリン | 高校生以上 9人 | 小中学生 6人(内新規1人) |
| 26日 | シーサケット | 高校生以上 7人 | 小中学生 5人(内新規1人) |
| | ヤソトーン | 高校生以上 5人 | 小中学生 9人(内新規1人) |
| 27日 | ロイエット | 高校生以上10人 | 小中学生 6人(内新規1人) |
| 28日 | マハサラカーム | 高校生以上 7人 | 小中学生 6人(内新規1人) |
| | カラシン | 高校生以上12人 | 小中学生 6人(内新規1人) |
| 29日 | サコンナコン | 高校生以上10人 | 小中学生 8人(内新規1人) |
| 7月 1日 | ムクダハン | 高校生以上 7人 | 小中学生 7人(内新規1人) |
| | ナコンパノム | 高校生以上 6人 | 小中学生10人(内新規1人) |
| | 11県合計 | 高校生以上86人 | 小中学生86人(内新規13人) |
| | | | 総支援人数172人 |



途中、ロイエットでは給食プログラムの支援をした学校を2校訪問し、また、それぞれで1人ずつ奨学生の家も訪問させていただきました。また、30日（日曜日）は授与式が出来ない代わりに、ナコンパノムの奨学生（専門学校生）の家を訪問しました。この2校の件と学生訪問に関しましては、紙面の都合上、また次回のNT通信でご報告させていただきます。

（坂さんへ、少し多すぎるので、給食プログラムと学生訪問は次回の報告にしたいのですが、どうでしょうか??今回の方が良ければ書きます。）

今回の授与式では、去年に引き続き学生に「できること」を準備してもらったのですが、それだけだと特技がなかったり、自信がない学生が参加しにくいということで、「できること、または、自分の直したいところ」を発表してください、と学生にお願いしてありました。各県3～5人程度の子供が楽器演奏やスピーチなどの発表をしてくれ、楽しい時間となりました。

授与式の流れは概ね、①教育委員会代表者の挨拶、②キャンヘルプタイランド代表者の挨拶、③奨学金授与、④集合写真、⑤奨学金に関する説明（手紙の書き方など）⑥3月実施予定ワークキャンプのPR、⑦「ちょうちゃんの光」を使っの絵本コンテストの紹介、といった具合です。

教育委員会代表者様からの挨拶の主な内容は、キャン、FREEへの感謝、子供達に奨学金を大切に使うようにという指導、また、「支援と交流（手紙を通して）」ということが多くの県で強調されました。最後に必ず「日本人、タイ人のドナーの皆様の優しい気持ちで、皆様もまた幸せになられますように」という言葉を頂きました。タイではこのような考え方があるようです。

キャンの代表として藤井からは、引率して下さった父兄、先生方への感謝と授与式を主催して下さいった教育委員会の代表者並びに担当者の方への感謝を述べ、子ども達には「勉強はもちろんですが、自分の夢を持って、みんなが前に進んで行くことを、ドナー様も応援しています。」と伝えました。

以下でほんの一部ではありますが、各県の授与式の様子をご紹介します。



6月24日サッケオ県

23日の夜までは雨が降っていましたが、当日の朝は曇りもなくなり、晴れ空となりました。サッケオでは、奨学生が32人（FREE奨学生を含む）と多いこともあり、会議室ではなく、ホールに椅子を並べた会場で、

子ども達は静かに、すこし緊張した様子で座っていました。私も初めての授与式ということで、かなり緊張していました。

振り返って思うのですが、この県では他県に比べて体の大きな男の子が目立ちました。他県では男の子に比べて女の子がかなり多いのですが、ここでは比較的男の子の奨学生の数自体も多いです。

数名の学生を待ち授与式を始めましたが、式自体は順調に進みました。私は前日練習したタイ語で、なんとか挨拶したのですが、通じたのか通じていないのか微妙なところでした。



「できること、直したいところ」の時間では、始めに男の子が三人で、ギターと歌を披露してくれました。アンプなども持参で、用意の良さに関心しました。次の手が挙がらなかったため、私が「直したいところ」の話をする、その後何人かの学生が、手を挙げてくれました。物理が苦手だけれど、これからは頑張りたいという子、サクスを演奏してくれた子、歌を歌ってくれた子もいました。

最後に学生を代表して男の子がスピーチをしてくれました。「小学6年生から、奨学金をもらっています。今は高校生ですが、大学に行く奨学金も受けてほしいですね。」という素直な挨拶に思わず笑ってしまいました。

6月25日ブリラム県、スリン県

ブリラムでも数人の学生を待ってから授与式をはじめました。担当者のスワイーさんが几帳面な方だったので、式はテキパキ進みました。奨学金を渡すと、子ども達はみんな手を合わせて会釈してくれるのですが、笑顔が見える子もいれば、緊張した表情のままの子もいました。印象深かったのは、「できること、直したいところ」として、開けると立体に絵が押し出されるカード（2ページあるので絵本とも言えるかもしれません）を作って、自分の人生について発表してくれた男の子です。「お父さんとお母さんが離婚してしまって・・・」と始まる身の上話は、悲しかったのですが、カードに描かれた彼の暮らす田舎の景色はとても繊細な色使いで奇麗に仕上げられていました。このカードを私にプレゼントしてくれたので、感動してしまいました。

午後のスリン県授与式ではサプライズがありました。言われるまで、むさんも気づかなかったのですが、受け付けの手伝いをしてくれていた、大学生の女の子は、実は以前キャンの奨学生だったのです。数学の先生



志望の彼女は今は近くの学校で教育実習中ということです。授与式の時期ということで、教育委員会の方に問い合わせ、自分から手伝いを申し出て来てくれたのだそうです。式が終わった後、彼女は「今度は自分が後輩を助けたいから」と言って、むさん（FREE）に奨学金を渡してました。その額はタイの方にとってはかなりの金額で、まだ学生の彼女がそんな気を遣うことはないのにも思いましたが、奨学生だった学生が、奨学金を役立てて立派に育ち、後輩を支援する。その環が生まれ始めているのは素晴らしいことだと思います。

6月26日 シーサケット県、ヤソトーン県

シーサケットでは子ども達も先生や係の方も他県よりもリラックスした様子です。むさんの話を真剣に聞く子ども達の顔には、話に合わせて笑い顔も見られます。私が配ったキャンのパンフレットや3月に予定しているワークキャンプのプリントも話を聞きながら、読んでくれていました。また、引率の先生のなかには絵本「ちょうちゃんの光」を熱心に読んでいた若い先生もいました。彼女は絵本の写真も撮っていて、教育者のほんの一部ではあるかも知れませんが、絵本制作に熱が入っている様子が伺えました。

「できること」として、高校1年生の男の子が日本語で挨拶をしてくれました。とても上手で全部聞き取ることができました。あとで、「どうして日本語を勉強し始めたのですか？」と質問すると「日本から奨学金を貰っているの、日本語を勉強し始めました。」との返事がありました。奨学金という一方通行になりがちな支援が、このような形で別の文化交流に繋がっていくことはとても良いことだと思いました。また、引率の先生の中には昔に経団連の奨学金を貰っていたという方がいて、「日本の方に感謝しています。君たちにもチャンスを生かして欲しいと強く思っている。自分ももっと上に行けるように努力して行って欲しい。」と子ども達に向かって熱く語ってくれました。

シーサケットは焼き鳥が有名な県ということで、お昼には教育委員会の方にイサーン(タイ東北部)の代名詞ソムタムと焼き鳥、そして、私の大好きなカーオニアオ(餅米)を食べに連れて行って頂きました。辛いのですが、酸味もあり、暑い夏には元気がでます。



午後のヤソトーン県は体育館のような大きな会場でした。副委員長の挨拶の中で言われた「ヤソトーンは豊かな県です。豊かというのは心が豊かということです。経済的には、格差が大きくなっています。大変な状況の中にある子ども達に対する支援は助かります。」という言葉は、今のタイが直面する状況をよく言い表しているのではないかと思います。タイが経済発展は目まぐるしいものですが、国としてタイが豊かになる一方、個々に目を向けると深刻な家庭環境、経済状況にある子どもは、相変わらずたくさんいるのも事実です。もちろん経済成長に伴い物価も上がっています。今回の授与式に参加することで、個々の子どもに目を向ける機会を頂き、貧困の中にある学生に支援を届け続けることの重要性を確かに感じました。

ヤソトーンではドナー様へ渡して欲しいと、餅米を入れるカゴをくれた子が三人もいました。さすがイサーンです。他にも枕、手づくりの星、お花、そして絵などを預かって来ました。枕などは残念なことに日本に持ち帰れない為、後日、写真のみドナー様にお送りいたします。誠に勝手ではありますが、ご了承頂けますようよろしくお願い申し上げます。

教育委員会の担当者の方からは「日本のドナーの方々には感謝しています。私たちが子どもに頂いたお金を大切に使うように責任をもって指導します。また、子ども達の勉強などを手助けしていきます。」というドナー様へのメッセージを承りましたので、この場をお借りしてお伝えいたします。

6月27日 ロイエット県

ロイエットは2007年に参加したワークキャンプの実施地で、私にとっては思い出の土地です。もう一度ここに来ることを、帰国する際には思いもせませんでした。ワークキャンプがあった学校の生徒も何人か奨学生として授与式に来ていました。名前を聞いて「あの子があんなに大きくなったのか!」と、時間の流

れを感じさせられました。「おはようございます」「ありがとうございます」と自然な日本語を数名の学生が返してくれたのは、ワークキャンプの影響のようです。

印象深かったのは副委員長が実際に県下の学校に関して熟知していることです。副委員長は遅れていた学生を待っている間に子どもに自己紹介をさせ始めたのですが、それがクイズ式なのです。「どこの学校?」「では校長先生の名前は?」「学校はここから何キロ?」「一番近くのお寺の名前は?」「校長先生はいつ定年?」と次々に質問します。「校長先生は気が多い?」なんていう質問まであり、皆の笑いを誘っていました。

この副委員長は授与式にもとても積極的で、司会進行をして頂きました。授与の後「ちゃんと正しく奨学金を貰いましたか?」と学生に問いかける様子に、とても好感を持ちました。

私は挨拶で「六年前にロイエットの学校で出会った子ども達が自分を仲間に入れてくれたことが嬉しかった。先生や村の方にも親切にして頂いた。ロイエットの皆さんに感謝します。」と話しました。長年心にあった気持ちを伝える機会に恵まれたことは、大変有り難いことでした。

6月28日 マハサラカーム県、カラシン県

マハサラカームでは、教育委員長も副委員長もみえなかったので、担当責任者の方が挨拶をして下さいました。その中で「このような奨学金は、一回切りのものが多い中、金額は少ないが継続して受けられることは大変良いことです。」という評価を頂きました。金銭的にも意味だけでなく、「奨学生であること」の継続そのものが、学生の進学へ対する意欲をいくらかはサポートできているということではないかと思えます。

「できること」の中では、ある女の子が、自分の通う学校の紹介を英語でしてくれたのが印象的でした。「I think my school is beautiful and comfortable!」と、自分の学校を素直に自慢に思えるところが、とてもすてきでした。私などは、学生時代にそのように感じたことは全くなかったですし、もちろん周囲にそんなことを言う学生もいませんでしたので、羨ましくも思いました。

午後のカラシンでは男女ともに太り過ぎの子が目立ちました。肥満の子どもは他県の授与式ではほとんど見られないのですが、確かにタイでも大人、子ども問わず、肥満が社会問題になって来ているようです。ケンタッキーフライドチキンが地方のショッピングセンターにも店舗を構え人気を集める、その一方、食料品売り場ではシシュガーフリー、カロリーオフの商品が目立ちますし、エアロビダンスやウォーキングがすっかり定着しているようです。「直したいところ」として、一人の男の子は「太っているから、ダイエットしたいです」と語ってくれました。彼の健康な将来のために、ぜひ成功させて欲しいものです。

6月29日 サコンナコン県

サコンナコンでは珍しくタイらしいお菓子が出されました。バナナの葉に包まれていて、中はココナッツの味のする餅米の上にカスタードがのっているお菓子です。他県では出されるお菓子には手をつけなかったのですが、これは美味しく全部頂きました。

シャイヨン副委員長は話の中で「タイはオープンな国です。インドのようにカーストで制限されることもなく、努力すれば、医者や看護婦になることもできる。私自身も家は貧しく、頭も良くなかったが、奨学金を受け、努力して教師になっ



た。父親はかき氷やイカ焼きを売っていた。」と言い、子どもを励ましています。実情はどうなのでしょう？「今頑張れば、良い仕事の就いて、あとで良い生活が出来る」とも言われました。果たしてどれだけの努力がどのような形で報われるのかと、私はこれまで出会った学生たちの未来に思いを馳せてしまいました。

「できること」では英語のストーリーテリングが良かったです。プレーオちゃんという小学6年生の小さな女の子なのですが、発音が良く、表現も豊かで分かり易いように声色を変えたり、手振りを付けて語ってくれました。学生の素質もあるのですが、実力のある先生の指導を受けているに違いありません。

サコンナコンの学生訪問

ご担当者様の提案で、このプレーオちゃんのお宅を午後には訪問させて頂きました。プレーオちゃんの家族構成は複雑で、祖母、その娘の娘（11歳）、そして息子の養子であるプレーオちゃん（12歳）の三人で暮らしています。プレーオちゃんは生まれたばかりで病院に捨てられ、それを今の「お父さん」が拾って来て母親に預けています。彼は占い師でバンコクで仕事をしていて、独身です。



3人が暮らす家は、涼み台のような6畳あるかないかの台に、屋根があるだけで、そこにテレビ、扇風機、そして荷物の山があるといった状態です。すぐ横にお父さんが家を建設中ですが、少なくとも1～2年はこの「台」で生活しているようです。

このような一見深刻な家庭環境ですが、プレーオちゃんは全く気にしていないと言う様子です。「私たちはたくさん野菜を育てているんだよ。果物の木もあるよ。」と庭を紹介してくれます。「ここはバンコクよりも、涼しいし、空気もきれいだから好き」「田んぼも見たいですか？私もいつも手伝っているんですよ！」と自信の置かれた環境に大満足の様子です。プレーオちゃんは休日には家事をして、田んぼも手伝います。「奨学金はどうするの？」と聞くと「おばあちゃんに渡します。余ったら、自分の勉強道具を買います。」と話してくれました。彼女の夢は学校の先生になることです。彼女なら、うまく進学の道が開ければ、きっと素敵は英語の先生になるはずです。

7月1日 ムクダハーン県、ナコンパノム県

前日から首相がムクダハーンを訪問しているため、かなり渋滞している所もあるとのこと。奨学生が渋滞に巻き込まれ遅刻することもあるかもしれないと、心配生をしていました。タイでは首相が来るとなれば、一大事のように、道の脇に首相の写真付きの看板が、歓迎の為に立っているのを、ムクダハーンのあちこちで見かけました。

偉い方々は皆、首相のお出迎えに行くことになっているらしく、授与式には教育委員長も副委員長も不在でした。遅れた子が一人いましたが、渋滞による大きな影響はありませんでした。

ある学生が自分の生活に関するエッセーを読んでもらったのですが、祖母と暮らしているが、親からの仕送りもなく、とても大変な状況にある学生でした。「奨学金はとても嬉しい。これでおばあちゃんの負担を少しでも減らしたい。」という言葉に心が洗われるような気持ちでした。タイでは親が亡くなったり、出稼ぎ出でいたり、祖父母と暮らしている子どもが本当にたくさんいます。日本では両親と子供という家庭が大多数ですが、それは家族の一つの形でしかないことに気付かされます。

午後のナコンパノムが最後の授与式です。ナコンパノムではピヤポン副委員長が VTR を披露されるという慣例があり、今年も VTR を見せて頂きましたが、どのようなメッセージがあったのか、映像からは判断できませんでした。その後日本の 3・11 の津波がタイで報道された際の映像を見せて頂きました。あの時の人々の悲しみや困難、そして今も苦境にある方々のことを考え、目が潤んでしまいました。「私たちも、日本の津波の際は大変心配しました」との言葉を頂き、私からは、「タイからは寄付金を頂き、皆様に感謝します」と伝えました。ここでは、ドナーの方へ枕や餅米のカゴのプレゼントがありました。子供と一緒に、枕を渡してくれたお母さんが何度の頭を下げながら、「コップン・マーク・カア(本当にありがとうございます)」と私の目を真っすぐに見て言われたのがとても心に残りました。私は自分が奨学金を出した訳ではないので、申し訳ないような気持ちでいました。このお母さんのように、支援をほんとうに必要とし、深い感謝の気持ちを抱いている方がいるということが、どうかドナーの皆様に伝わればと思います。



以上各県授与式の報告でした。奨学生から預かりました、調書と手紙は翻訳作業が終わり次第、ドナー様にお送りいたしますのでよろしくお願いたします。また、子供達はドナー様に感謝すると同時に、ドナー様や日本の生活などに興味を抱いています。ドナー様との手紙での交流は、子供達のやる気にもつながります。返事を頂けたら、こちらで翻訳して、学生にお届けしますので、ぜひ、お手紙をお寄せください。

奨学生からの手紙

2013年7月4日

すみれ基金のみなさん、こんにちは。

私は アパッサラー・ケーオケソンと申します。ニックネームは「ベース」です。今はチェンマイ職業訓練大学 (Chiangmai Vocational College) で観光ビジネスの勉強をしています。短大課程の1年生です。2013年に奨学金を授与しています。

この奨学金に受かった知ったときは、とても嬉しかったです。この奨学金は私の夢を更に伸ばしてくれます。一人の女の子だけで、支援者なしではここまで来れないでしょう。奨学金を支援してくださって本当にありがとうございます。夢が現実になったら、みなさんへのお礼として社会に還元したいと思います。



アパッサラー・ケーオケソン

2013年5月31日

みなさんこんにちは。まずは奨学金を支援してくださってありがとうございます。正直言って申請書を出したときは期待していませんでした。他の奨学金も申請してみましたが、返事はひとつもありませんでした。第一審査を通ったという通知が来たときはとても嬉しかったです。少し期待しましたが、確信はしませんでした。最後の審査結果で自分の名前があったのはとても嬉しかったです。私に奨学金といいチャンスをありがとうございます。一所懸命勉強し、社会のいい人になるように、両親やみなさんががっかりしないように頑張ることを約束します。

今は私はランブーン工業団地でアルバイトをしています。働いている工場は電子部品を生産しているところです。(～雑談～) 日給は400バーツ以上あり、夜間の出勤なら500バーツ以上になります。もう一度お礼を申し上げます。いいチャンスを頂いて感謝しています。奨学金を応募した他の90人の人の分を頑張ります。”ありがとうございます” :)



ラピーポーン・プレーチョンプー
ラッチャパット・ランブーン大学

報告2

～建設プログラム視察報告～

報告者 西川 弘達

7月5日に現在建設支援プログラムを実施中のバーンメーガオ小学校を訪問しました。

<学校>

この学校はタイ最北のメーホンソン県とターク県の県境に位置し、ミャンマー国境からも20キロほどのところに位置します。生徒はほとんどが山岳民族、特にカレン族の子供たちです。小学校でありながら、学寮を持ち、全校生徒の約半数が学校敷地内にある寮で生活しています。

子供たちの親世代はミャンマーからの移民が多く、タイ語が不自由な人も多いそうです。家庭でも、学校でも授業以外はカレン語で生活しているためか、子供たちのタイ語にもかなりの訛りがあり、低学年の子はうまくタイ語でコミュニケーションがとれないようでした。私たちが長年支援を続けてきたイサーン地方にも訛りはありますが、タイ語が話せないという子はほぼゼロでした。親がタイ語母語話者でないこと、カレン語とタイ語に類似性がないこと、テレビがまだ日常生活に入り込んでい



ないことなどが大きな影響でしょうが、貧困などの問題に、言葉の問題が大きく絡んでいることを目の当たりにして考え込んでしまいました。この学校では、就学すぐの子供たちと先生との意思の疎通が思うようにできないことから、卒業生（中学校卒）の一人を臨時教員として採用し、通訳業務をお願いしているとのことでした。

校長先生は、この学校に着任して14年ほどになるそうです。当初は近隣の集落を周り、子供を学校に通わせるように親を説得して回ったそうです。回りは自然公園に指定されるほどの何も無い森林で、その頃は道もなかったそうで、船を使って川沿いの山岳民族の村を探しては教育の重要性を説いて回ったとのこと。子供を学校にやるというのは労働力が一人分減るということなので、親の反対がなかったのか聞いてみると、以前はやはり理解のない親が多く説得が難航することもあったそうですが、最近では多くの親に教育の重要性が理解されるようになり、強い反対はないそうです。休み明けも最近では、親が進んで寮生である子供を学校まで送り届けるようになったとのこと。校長先生の長年の努力には頭が下がる思いです

また、この学校は、生徒の自治が非常にしっかりしているという印象を持ちました。様々な役割が設けられ、生徒それぞれが与えられた役割をしっかりとこなしています。視察時も学校内は生徒会長が、寮は寮長が、農園はその担当者が案内してくれました。生徒主体の農業プロジェクトや散髪屋もあります。ここで自治を学び、卒業後に村の評議員などに立候補する卒業生も出ているとのこと。とてもしっかりした教育が行われていると感じました。

<支援の内容と進捗状況>

この学校は、全校生徒130名ほどの小規模数ですが、山岳民族の就学率が上がっていることなどから生徒数は増加傾向にあるそうです。今は一つの教室を壁で仕切ったりして教室を確保して、



教員室もありません。（教員室だけは立派という学校はよく見ますが、教員室をなくして教室を確保しているような学校は見たことがありません。）キャンヘルプタイランドではこの学校の教室棟（3教室）建設のための資金を支援しています。当初の計画からは柵を子供たちが座れるようなベンチ型に変更したり、建設費節約のために盛り土をやめたりするなどの変更が加えられましたが、工事は順調に進んでいます。私たちの訪問時は建物の外見ができあがった状態でした。今後内装が加えられて行きます。

あわせて、進捗状況の記録や出金の記録も確認しましたが、どちらも非常にしっかりと記録されました。進捗状況と適正な記録が確認できたことから、早々にFREEをとおして第2回目の送金を行う予定です。（この号が発行になるころには送金手続きが完了しているはずです）

報告3

～3月海ツアー～

報告者 浅井 美里

キャンヘルプタイランドの皆さまお久しぶりです。4年前にカサロンの家に長期滞在した浅井美里と申します。今回は、子どもたちを海へ連れて行くツアーに初めて参加させていただきました。チケットをぎりぎり手配した都合で深夜1時ごろにスワナプーム空港に到着し、ベンチで夜を明かしました。前回のタイの滞在はほとんどチェンマイだったので、今回はバンコクをほぼ初めて観光することになりました。私はタイ語が読めないで、地元の人が利用するバスを利用するのが苦手で、バンコクの市内までどうやって移動しようと思っていたら、なんとエアポートラインという便利な乗り物ができていました。プラポーン駅まで約20分くらいでしょうか？本当に便利になりましたね。

夕方キャンのメンバーと空港で落ち合い、目的地であるパタヤーまでバスで向かいました。1日目の夜、ようやく子どもたちと再会できました。ただし年齢の高い子たちが先に到着していたことで、なんとというか「ピーミサト会いたかったよ～」というような感動的な再会ではありませんでした(残念)しかし子どもたちの成長は目のみはるものがあります。4年前はあんなに小さかった子どもたちが大人に見えます。声変わりもして、対応も大人になっていて、たくましい姿に、皆さまの支援が子どもたちの成長となってみられることに感謝しました。

次の日に小さい子どもたちに再会しました。私のかわいがっていた一人の幼い女の子は、しっかりした少女になっていました。私の後ろについて離れなかった甘えん坊が、今ではおしゃれをして、男の子とケンカもせず座っています。私は少しさみしかったです、これが子どもの成長なのだとうれしく思いました。

海へ連れて行くツアーなので、海にも触れたいと思いますが、パタヤーから約50分離れた海でした。宿泊したバンガローの前の海が、宿泊客専用の海になっており、誰もいない美しい海を独り



占め状態でした。さらに海軍が保有する施設でシュノーケルをしたりと遊ぶ要素も満載でとても充実したツアーでしたよ。子どもたちも、本当に山育ちなのかしら？と思うほど海に夢中でした。さらにツアーには、イサーンからボランティアとして学生さんが参加したり、チェンマイから日本人留学生が参加したりと、若い世代の協力も見ることができました。夜には、お互いの民族の紹介が行われました。パソコンで紹介するハイテクなものや、実際に衣装を着て踊ってくれる民族舞踊付きです。子どもたちに自分たちの民族をしっかり意識させ、誇りを持たせているのだと感じました。

個人的には、私が滞在したときにカサロンに預けられたリス族の双子の兄弟、チョウティーウとチョウティーワのタイ語がペラペラになっていたことに驚きました（笑）ただ人前だと恥ずかしくて話せなくなるのは変わっていませんでした（笑）

皆さまもぜひお時間があれば、ツアーの参加をお勧めします。皆さまのご支援がどう形になっているのか、知っていただけるととてもよい機会だと思います。私自身は貢献できることも少ないのですが、こうして皆さまにお伝えできれば幸いです。いろいろな支援はありますが、子どもの支援ほど未来への希望を感じられるものもないなあと感じるツアーでした。

運営委員会

(2013年5月～2013年7月)

| 活動 | 月日 | 場所 | 内容 |
|-------|----|-----|--------------------|
| 運営委員会 | 5月 | 事務所 | 奨学金授与式準備、 |
| 運営委員会 | 6月 | メール | ネットワーク通信編集会議 |
| 運営委員会 | 7月 | 事務所 | 奨学金授与式報告 建設プログラム報告 |

運営委員募集中！

一緒にキャンヘルブタイランドの運営に参加してみませんか？

通常は毎月第4土曜日に事務所に集まり、会の運営について話し合っています。見学でも結構ですので是非事務所へ遊びに来てください。

次回の運営委員会は **開催日未定のため参加希望の方は事務局までメールでお問い合わせください。**

編集後記

暑い日が続いていますが皆様はいかがお過ごしでしょうか？「タイの田舎の夜はもっと涼しくて過ごしやすんだらうなあ」と考えながら日本の熱帯夜を我慢してやり過ごす毎日です。特に名古屋の夏は信じられない暑さです。きっとタイ人もびっくりです。

最近、家族とキャンプにハマっています。テントを張ってバーベキューをしてアウトドアライフを楽しんでいます。タイの田舎でのワークキャンプを経験しているので、日本のキャンプ場は本当に快適に過ごせます。

<キャンヘルブタイランドネットワーク通信 Vol.62>

発行 キャンヘルブタイランド
 発行人 西川 弘達
 編集人 坂 茂樹
 発行日 2013年7月27日
 住所 〒450-0003
 名古屋市中村区名駅南2-11-43
 NPOステーション内
 Tel & fax 052-566-5131
 (OPEN: 土曜の13~16時頃)
 E-mail: canhelp@npo-jp.net
 ホームページ: <http://www.canhelp.npo-jp.net>